

取組：パフォーマンステストを位置付けた単元構想に基づく言語活動中心の授業の推進

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

- CAN-DOリスト形式による学習到達目標の設定、公表の状況、到達度の把握
公表している学校や到達度を把握する学校の割合は依然として低く、CAN-DOリストと日常の授業実践とを結び付けることが課題。

	設定		公表		把握	
	2018	2019	2018	2019	2018	2019
中学校	100%	100%	15.9%	16.0%	59.3%	62.5%
高等学校	100%	100%	40.5%	32.1%	45.6%	38.5%

- 【確実に公表している地域の特徴】→
- ①年度当初にCAN-DOリストの内容を生徒と共有。
 - ②身に付いた力をどのように測るのかについて、年間指導計画やパフォーマンステスト等の計画を提示。
- 【到達度の把握割合が高い地域の特徴】→
- ①パフォーマンステストの実施回数が多い。
 - ②英語を用いてできるようになったことをパフォーマンステスト等で計画的に評価。

Plan

■取組計画

小・中・高等学校英語担当教員の資質・能力の育成に向けた研修等を実施する。研修の一部をやまぐち総合教育支援センターや外部機関との連携により行うこととし、教員の英語力・指導力の専門性向上をめざす。また、研修協力校や小中高連携英語教育推進校を中心に公開授業を設定し、授業を通じた具体の姿で研究内容等が普及されるようにする。

■体制

- ・英語教育推進教員(小・中)と小学校英語専科教員、市町教育委員会担当者との連絡を密にし、英語教育実施状況調査項目を中心とした施策等の確実な実施を促していくために、オンラインによる情報交換、研修等を行う(やまぐち英語教育連絡会:年7回実施)。
- ・英語教育実施状況調査項目を中心とした目標設定を各市町単位で行い、学校訪問等で確認した達成状況等を共有していく。

Do

■英語指導カススキルアップ研修会

- ・全学校から1名が参加するオンライン会議システムを活用した研修会。
- ・研修会前に文部科学省/mextchannelを視聴及びパフォーマンステストの実践事例をクラウド上で共有、県・市町教育委員会指導主事が評価。

■小中高連携英語教育推進校による校種間連携の推進

- ・県内7地域に小中高連携英語教育推進校(31校)を指定。
- ・同一中学校区内で連携する学校と研究テーマを設定、合同研修会の実施。
- ・各推進校の授業研究会及び研究協議の実施。
- ・パフォーマンステストを位置付けた各地域の小中連携カリキュラムを作成。

https://drive.google.com/drive/folders/1bjtbpwqBTZCjgieYI77c_sR_vTZcb9sKSf?usp=sharing

Check

	設定		公表		把握	
	2019	2021	2019	2021	2019	2021
小学校	—	87.4%	—	53.9%	—	69.1%
中学校	100%	100%	16.0%	74.1%	62.5%	76.3%
高等学校	100%	100%	32.1%	53.3%	38.5%	61.3%

- CAN-DOリスト形式による学習到達目標の設定、公表の状況、到達度の把握
- ・全ての中・高等学校でCAN-DOリストを設定しており、公表している学校及び到達度の把握に活用している学校の割合も伸びてきている。
 - ・学習到達目標を公表している学校や到達度を把握している学校の割合は100%に達しておらず、CAN-DOリストの学習指導・評価等への活用が課題。

Action

■外部試験の活用

- ・県内全中学生に外部試験を実施。
- ・外部試験の結果を踏まえ、単元計画や年間指導計画、CAN-DOリスト形式による学習到達目標等を見直し、指導体制の再構築を促進。

■関係機関等との連携の充実

- ・やまぐち英語教育推進連絡会(年10回予定)の実施。
- ・英語教育実施状況調査項目を中心とした施策等の確実な実施を促進。
- ・学校訪問等で確認した各学校の状況等の共有。

成果の普及

■研修協力校が作成した指導案、学習到達目標等

- ・小学校 <http://shimata-e.hikari-net.ed.jp/english.html>
- ・中学校 <https://migitajh.blogspot.com/?zx=3ad3674557cb6c1c>

課題

目的・場面を意識した活動を意図的に仕組むことにより、「やり取り」を中心とした言語活動をより充実したものにする。

具体的な取組と工夫

- 授業4Stepsの活用・・・1年生から同じ流れで授業を進めることにより、児童が安心して学習に取り組み、自分の考えを積極的に表現できるようにした。（Warm Up, Practice, Activity, Look Back）
- Can-Doリスト、ルーブリック評価表の作成・・・評価規準、評価基準を設定することにより、どの視点で、どのような評価をすべきか明確にした。タブレット端末を用いて児童同士で撮影した動画等も、この基準に従い、公平公正な評価に近づけることができた。
- 年3回の授業公開・・・「言語活動を充実させるための工夫」という視点で授業公開を行い、より効果的だった手立てや課題などを共通理解した。3回目の授業では、他校とZOOM交流を行い、自分の思いを伝える楽しさを実感させることができた。日頃の授業においても、英語だけで思いを伝えようとする姿が多く見られるようになった。
- 校内体制として
 - ① 授業公開前後に、山口大学猫田准教授による指導を受け、研究の方向性を確認し、今後の課題について御示唆をいただいた。
 - ② 授業公開日の放課後に振り返りの時間を設け、参観者からの気付きや意見を出し合い、授業力向上を図った。



成果

- Small Talkで身に付けたスキルを「やり取り」の場面で活用させることで、より充実した言語活動に結び付いた。継続して即興的な会話を繰り返すことが、目的や場面を意識したやり取りにつながることを実感することができた。
- タブレット端末で撮影した動画を視聴することで、自分の姿を客観的にモニタリングすることができ、コミュニケーション力の向上を自覚する児童が増えた。
- 意識調査 『英語の文字や単語、文を読んだり書いたりすることは楽しい』

小5・・・令和3年10月	72%	令和4年2月	85%(+13%)
小6・・・令和3年10月	70%	令和4年2月	84%(+14%)

課題及び改善案

- ICTとALTの活用バランス
 - 個別の活動にはICT(タブレット端末等)を活用し、全体での共有が必要な時はALTを十分に活用する。
- 視点を非言語的内容から言語的内容へ
 - 指導者が言語的内容を見取る視点を持ち、児童同士のやり取りから適切なコメントを返していく。

課題

- ① 生徒の英語学習に対する意欲の向上・・・生徒自身が本当に伝えたい内容をつかめないままの知識・技能中心の授業展開に課題。
- ② 小中で連携した言語活動の充実・・・新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあり、地域連携や小中連携の取組が滞っている。

具体的な取組と工夫

■ 生徒の問いを社会とつなげる「学び手中心」の授業設計

- ・CLIL(内容言語統合型学習)で生徒自身が伝えたい内容を重視した単元計画を作成、実際のコミュニケーションの場としての授業展開。
- ・「正解のない題材」を通して多様な考えを共有、授業で学んだことをリアルな社会とつなげる。
- ・教科を横断し、ICTを活用しながら目的・場面・状況・伝える相手が明確な場面設定を工夫。

■ 小中連携CAN-DOリストの公表と達成度把握・小中で指導方法を共有

- ・「聞く」、「話す」活動をベースに言語活動を通して言語材料に気付く場面の設定。
- ・「小中外国語における7年間の学びでつけたい力」をめざした言語活動を単元計画に反映。
- ・ICTを活用し生徒による言語活動の場面録画→自己分析→教員からフィードバックを繰り返す。

授業公開（相手を意識しながら、やりとりをたのしむ生徒を育てる～CLILとCAN-DOの5つのCでつなげる「言語活動」の工夫～）指導助言者：上智大学 吉田研作 名誉教授
・SDGsをテーマに右田地域のために自分がしたい取組についてポスターセッションを行った



右田地域のSDGsについてやりとりする1年生

成果

- 上記2つの課題である、①生徒の英語学習に対する意欲の向上②小中で連携した言語活動の充実については、下記公開授業学級における単元学習後のアンケート結果のとおり、肯定的回答率が60%→100%となった。
- 小中連携CAN-DOリストの効果的な活用により、生徒全員が自信をもって、単元末に英語で自分の考えを伝えることができ、到達度目標を達成することができた。

右田小中連携カリキュラム



公開授業学習指導案等



課題及び改善案

- カリキュラム・マネジメント
- 組織的な連携教育の充実

・教科横断学習をすすめるためには年度当初からカリキュラム・マネジメントの視点が必要である。また、地域全体で「めざす生徒の姿」を共有しながら研修に取り組むことで、より効果的に英語教育をすすめ、子どもたちの資質・能力を育むことができると考える。